

## H-4

### ジェスチャーが言語によって指標されるとき アルタ語の位置保持詞 (placeholder) の用法と相互行為上の役割

木本 幸憲

#### 1. はじめに

言語現象は極めて多岐に渡る視点から観察・記述・説明することができるが、特に(Enfield 2015:9-17)によると、通時的視点(diachronic)、共時的視点(synchronic)以外に、分析的観点は、言語現象を認知処理の問題として扱う微視発生的視点(microgenetic)、言語習得の問題として扱う個体発生的視点(ontogenetic)、進化論として扱う系統発生的視点(phylogenetic)、そして社会的相互行為として扱うエンクロニイ的視点(enchronic)に分けることができるという。

本研究では、一見すると共時的に文法記述をする際に、非体系的であったり、既存の分析的概念で記述不能と見捨てられてしまう現象が、言語現象を発話とそれによって構築される社会的相互行為として観察することで、十分に記述されうることを見る。特に今回見る現象は、フィリピンのアルタ語のフィールド調査の際、よく出くわす形式、*wa/wana* である。

- (1) *sakay =di::: (0.4) i-wa ta:: dut. i-lutu =di.*  
and =3PL.ERG TR-WA OBL fire TR-cook =3PL.ERG  
「そして:::, 火にあれした。火に掛けた。」(arta0114, 17:46)

#### 2. 分析手法

##### 2.1. アルタ語とは

アルタ語 (Arta, ISO639-3: atz) は、フィリピンのルソン島、キリノ州とオーロラ州で9~11人の母語話者によって用いられている言語である(Reid 1989; Kimoto 2017)。

- (2) *Awan=na=ami p<in>abay-an na Dios.*  
NEG =3SG.A =1PL.P <PST>CAUS-neglect-TR SG.A.INDF God  
「神様は我々を見捨てなかった」

- ・ 述語先行型 (否定語など、述語よりも前にくる要素あり)
- ・ 動詞は形態論的に複雑化しうる (テンス・アスペクト、ヴォイス、使役など)
- ・ 人称詞や一部の副詞的要素は述語や述語前要素に接語として付加される
- ・ NP 内部では、決定詞が名詞に先行する (決定詞は数・格・定性で屈折)

##### 2.2. 分析データについて

別の目的で書き起こし・語分割・グロス付与を行った 1292 節のアルタ語の談話コーパスを使用し(Schnell and Schiborr 2018)、そこから 70 例の *wa/wana* を収集。

ただし 5 例は聞き取り・解釈不可能と判断し保留。その他 65 例について分析。

以下の観点について分析を行った。

1. 統語論: 何らかの統語的フレームに埋め込まれて実現しているかどうか
2. 形態論: 形態論的に派生・屈折を伴っているかどうか
3. トラブルの兆候: 語形成のトラブルのなんらかの兆候とともに現れているか
4. 置き換え: 後続する文脈でより具体的な表現に置き換えられているか
5. ジェスチャー: ジェスチャーが共起しているか。もしそうだとしたらどのような種類のジェスチャーが共起しているか
6. 視線: 特徴的な視線が見られるかどうか

### 3. 位置保持詞用法: 表現産出トラブルに現れる *wa/wana*

位置保持詞とは、Hayashi and Yoon (2002:37) が以下のように定義づけた形式のことを表す。

- it is a referential expression that is used as a **substitute for a specific lexical item** that has **momentarily eluded the speaker** (and which is often specified subsequently as a result of a word search)
- it **occupies a syntactic slot** that would have been occupied by the target word, and thus constitutes a part of the syntactic structure under construction

#### 3.1. 形態統語的特徴

*wa/wana* は、以下の表にあるように、そのまま名詞として用いられる他に、接辞を取って形容詞・動詞のパラダイムに編入される。

表 1 *wa/wana* のパラダイム

	時制	自動詞	他動詞
動作動詞	非過去	<i>majuwa(na)</i>	<i>wan, iwa(na)</i>
	過去	<i>minajuwa(na), minanwa(na)</i>	<i>niwa(na)</i>
潜在可能動詞	非過去	<i>makawa(na)</i>	<i>mawa(na)</i>
	過去	<i>nakawa(na)</i>	<i>minawa(na)</i>
状態動詞	–	<i>tiwwa(na)</i>	–
形容詞	–	<i>mewwa</i>	–
非定形動詞	–	<i>pajuwa(na)</i>	<i>pajiwa(n), pajuwan</i>

さまざまな統語フレームにおいて、名詞句、節の一部として機能する。

#### (3) NP の内部で名詞として機能

- a. *wa=di* (PLH=3SG.GEN) 「彼らのあれ」 (arta0117, 01:15)

- b. *wa=y* (PLH=SPC) 「(ある特定の) あれ」 (arta0002, 01:31)  
 c. *tidi wa=y* (PL.DEF.ABS PLH=SPC) 「(複数のある特定の) あれら」 (arta0002, 00:12)

(4) 節の内部で動詞として機能

- a. *m<in>an-wa =tid =ta*. 「彼らはそこであれをした」 (arta0117, 06:57)

<PST>INTR-PLH =3PL.ABS =DEM.DIST.OBL

- b. *tiw-wana =d =tid [ti apu =ku ]*

STV-PLH =already =3PL.ABS SG.ABS.DEF grandparent =1SG.GEN

*[ti gəda didi ayu =y]*.

SG.OBL.DEF trunk PL.GEN.DEF tree =SPC

「私の祖父らは、木の幹のところであれしていた。」 (arta0117, 03:09)

3.2. 表現産出のトラブルの兆候

45 の例 (69%)で、*wa/wana* を含んだ発話に以下のような語産出 (表現産出) のトラブルの兆候として理解しうる特徴がみられた。

(5) a. 音の引き延ばし (sound stretch)

*i::-wa =mi ti dut =i*. 「(それを) 火にあれする」 (arta0002, 03:58)

TR-PLH =1PL.ERG OBL fire =SPC

b. 間 (silence)

*da (1.0) maŋ-uwana =d* 「(爆弾と銃弾を) あれしたからだ」 (arta0117, 04:35)

because INTR-PLH =just

c. 語中での音の区切れ (cut-off)

*naŋ- (1.1) naŋiw-wa =tid* 「彼らはあれし合った」 (arta0117, 10:51)

PST.INTR PST.RCP-PLH =3PL

3.3. 置き換え

28 例 (48%) において、その後により具体的な語彙へ置き換えられる例が観察された。

(6) *Konta tanakwan [i wa =di, dayyalek]*.

but different ABS.DEF PLH =3PL.GEN dialect

「しかし彼らのあれ、方言は (ある方言とは) 異なる。」 (arta0606, 13:46)

*wa/wana* の機能は、発話が遅延した際に、その原因となる思い出せない表現の代わりに *wa* が埋め合わせることで、発話を前に前進させ、一時的な応急処置を行うことにある。

4. ジェスチャーを指標する *wa/wana*

4.1. 非言語的資源を伴った複合的記号

通言語的にその存在が認められている表現産出のトラブルに対処する方略としての *wa/wana* の役割は、その形式の一部でしかない (表 1)。18 例中 13 例でジェスチャー等、非

言語的な記号的資源を指標する用法が観察された（その他の少数の用法としては、慣用句用法 *ta wa di:ti* 「ある昔、かつて、以前」、*wa:....y* 「ずーっと遠くに／長く／奥深く」という間投詞がある）

表 1 非流暢性と置き換えの分布

	非流暢性あり	非流暢性なし
置き換えあり	26 例 (40%)	2 例 (3%)
置き換えなし	19 例 (29%)	<b>18 例 (28%)</b>

非言語的な記号資源は、(i) 指さしジェスチャー、(ii) 声真似、(iii) 手を用いた描写的ジェスチャー、(iv) 全身での演技的ジェスチャーが見られた。

(7) [arta0114, 18:27] (青竹を鍋として用いる調理法について解説している。)

1. *I-lu:-lunsud =di =d i ba:lag =na =y*  
TR-ASP-put =3PL.ERG =COMP ABS.DEF meat =3SG.GEN =SPC
2. *aydi gaddaŋ =na ta biyas. I-wa =di =d ta dut.*  
and fat =3SG.GEN OBL bamboo TR-**PLH** =3PL.ERG =COMP OBL fire  
「(猪の) 肉と脂を竹筒に入れて、火の中にあれする／こうする」

(8) [arta0606, 20:05] (イラギン人という部族がいかに野蛮であるかについて、他部族を見かけても挨拶もせず、背中を向けたままであることについて述べている)

1. *Tiw-wana =te: =ti, muna =te: =ta.*  
STV-**PLH** =only =DEM.PROX.OBL like =only =DEM.DIST.OBL  
「ここであれして、ああやっている (背中を向けたジェスチャー)」
2. *maski me??a:du pe:-bu:bud =mu, si:paŋ =te: =tidya*  
even ADJ:a.lot CMT-ASP:ask =2SG.ERG same =only =PL.DEM.DIST  
「たとえ君が多くを質問しても、同じだ。」
3. *konta tit-taŋəg =te:, tiw-wana =ta.*  
but STV-turn.back =only STV-**PLH** =DEM.DIST.OBL  
「結局背中を向けたままで、ああやっている (背中を向けたジェスチャー)」

#### 4.2. 表現産出トラブルと複合的記号使用

表現産出トラブルと、複合的記号使用は、相互排他的ではない。むしろ多くの例で、表現産出のトラブルが観察される際に、描写的ジェスチャーが観察される。話者が表現産出のトラブルに見舞われた際に、言語表現とは異なる類像的・指標的記号が使用できる場合には使用する (cf. *dayyalek* 「方言」などの概念)

(9) [arta0117, 04:35] (台風が来たときにどこに避難するかについて A と R が話している。)

1. A: *Um-aŋay =de: =tid ti (1.3) wa=y*  
 <INTR>go =COMP=3PL.ABS OBL **PLH**=SPC  
 「彼らは...あそこ...に行つて」(右手で中に入るジェスチャー)
2. R: *diso:no:*  
 inside  
 「中に」
3. A: *karagatan a meded-diso:no:*  
 rock LIG ADJ.INT-inside  
 「岩の中深くに」

(10) [arta0114, 05:09~] (会話をしている最中、Dが腰を掛けている床の板と板の間にお尻の肉が挟まった。Yが「どうしたんだ」と聞いたあとの会話。)

1. D: *Maŋa:-lipit i buli =ku =y.*  
 STV-pinch ABS.DEF buttocks=1SG.GEN =SPC  
 「(私は) お尻を挟んだよ。」
2. Y: *Med-dəgəs buli =mu =y?*  
 ADJ-pain buttocks=2SG.GEN =SPC  
 「お尻が痛いのか?」
3. D: *O:ni. Pas-saldit ni wa =y, tabla.*  
 yes NONF-pinch DEF.ERG **PLH** =SPC board  
 「うん。あれ(右手で床の板を指す)、木の板に挟まれて。」

## 5. 結語

アルタ語の位置保持詞 *wa/wana* は、主に以下の二つの用法に跨がって使用されている。まず、3節で見たように、ある統語位置を占めることで、そこに入るべきであった表現について産出上のトラブルがあることを示す用法である。次に、4節で見たように、主要な記号資源をジェスチャーに代表される非言語的なものに切り替える用法である。また、二つの用法は相互排他的ではない。むしろ発話産出上のトラブルがある際に、非言語的記号を組み合わせることで、話し手が何を言わんとすることに対してより多くの情報を提供し、その内容を理解させることを促す点で、二つの用法は並立しうる。

表現産出のトラブルはジェスチャーなど他の記号媒体が補助的に用いられることによって解決に向かうことがある。これは、ジェスチャーが対応する言語記号よりも時間的に前に産出される、前置きジェスチャー (pre-positioned gestures) の現象と類似している (McNeill 1992; Kendon 1980; Streeck 1988)。

アルタ語の位置保持詞は、共時的な言語体系の内部のみの視点からは不十分にしかその機能を特定できない。しかし発話(utterance)を複合的記号として見る立場からこの用法群を捉えることで(Kendon 1980; Enfield 2013)、その機能がより明確に記述可能となり、より一般

的には、共時的観点を言語を社会的な（対人的な）相互行為の側面から検討するエンクロニイ的観点を組み合わせることで、言語とコミュニケーションの複雑な関係の一端を明らかにすることができるだろう。

#### 参考文献

- ENFIELD, NICK J. 2013. *Relationship thinking: Agency, enchrony, and human society*. Oxford: Oxford University Press [井出祥子（監修）横森大輔・梶丸岳・木本幸憲（訳）『やりとりの言語学：関係性思考がつなぐ記号・認知・文化』大修館書店] .
- ENFIELD, NICK J. 2015. *Natural causes of language: Frames, biases, and cultural transmission*. Berlin: Language Science Press.
- HAYASHI, MAKOTO; and KYUNG-EUN YOON. 2002. A cross-linguistic exploration of demonstratives in interaction: With particular reference to the context of word-formulation trouble. *Studies in Language* 30.485–540.
- KENDON, ADAM. 1980. Gesticulation and speech: Two aspects of the process of utterance. *The relationship of verbal and nonverbal communication* 25.207–227.
- KIMOTO, YUKINORI. 2017. A grammar of Arta: A Philippine Negrito language. Kyoto University, Japan.
- MCNEILL, DAVID. 1992. *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- REID, LAWRENCE A. 1989. Arta, Another Philippine Negrito Language. *Oceanic Linguistics* 28.47–74.
- SCHNELL, STEFAN; and NILS N. SCHIBORR. 2018. Corpus-based typological research in discourse and grammar: GRAID and Multi-CAST. *Asian and African Languages and Linguistics* 12.1–16.
- STRECK, JÜRGEN. 1988. The significance of gesture: How it is established. *IPrA Papers in Pragmatics* 2.60–83.